

「境界関係」のケア実践**ーデンマーク・リエイブルメント支援における裁量と協働ー**

○ 大阪大学 石黒 暢 (2566)

[キーワード] 介護労働、ケアワーク、リエイブルメント

1. 研究目的

高齢化が進む国では、高齢者の自立支援を目的としたリエイブルメントが政策的に導入されている。日本では「短期集中予防サービス」として一部の自治体で導入されつつある。リエイブルメントでは各利用者の個別ニーズに合わせたプログラムが必要となるが、その実践は、制度的標準化と個別対応との間で揺れている。デンマークでは自治体主導でリエイブルメントが提供されているが、実際の現場では制度に沿った支援とともに、介護職員が利用者の多様なニーズに応じて柔軟に対応している。本研究は、デンマークの在宅リエイブルメント支援に焦点を当て、制度的枠組みのなかで介護職員がどのように裁量を行使し、支援のあり方を調整しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究では、ケアを「境界関係」で行われる実践として捉える。ケアは制度と市民、専門職と生活者、標準化と柔軟性、異なる専門領域など多様なロジックや価値が交錯する境界で実践されるからである。このような視点から、デンマークのリエイブルメント支援がどのように構築・再構築されているかを実証的に検討する。デンマークの2自治体（A市・B市）における在宅リエイブルメント支援現場を調査対象とし、質的調査によりデータを収集した。調査方法は参与観察と半構造化インタビューを併用し、両者を組み合わせることで現場における実践の多層性を立体的に把握することを目指した。参与観察は2023年3月から2024年8月にかけて合計約160時間実施し、延べ95回の訪問に同行し、介護職員の行動や支援プロセスを詳細に記録した。また、計8名の介護職員へのインタビューを実施し、個別支援の判断や調整に関する語りを収集した。データ分析には質的コーディング手法を用い、支援実践に内在するパターンを抽出した。

3. 倫理的配慮

調査実施にあたって事前にA市とB市の在宅介護部に研究計画を口頭と文書で説明し、調査の内諾を得た。インタビュー調査参加者には口頭と文書をもって、研究の趣旨、任意性、個別事例が特定化されないよう配慮すること、データの取り扱いに関する事等の倫理的配慮について説明し、書面または口頭で同意を得た。データは個人が特定されないよ

うに処理して細心の注意をもって厳重に管理することも説明した。訪問する高齢者に対しては、自治体から事前に口頭で説明してもらい同意を得た上で、訪問時には調査者と介護職員から利用者に向けて再度説明を行い、口頭で同意を得た。

なお、本研究は大阪大学人文学研究科倫理審査委員会の承認（2022063，箕 A2024-8）を得た。また、本研究は日本社会福祉学会研究倫理規程に沿って行われた。本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

リエイブルメント支援の現場における実践の特性を明らかにするため、質的データのコーディングを行い、47 のコードを抽出し、7 つのカテゴリーに整理した。

リエイブルメント支援の現場における実践は、制度に則った定型的アプローチに加え、利用者の多様なニーズに即した柔軟な対応が頻繁に行われていた。自治体が対象者を選定し、支援の目的説明や目標設定、評価ツールの活用などが体系的に行われる一方、介護職員は訪問において利用者の状態や希望を丁寧に見極め、支援内容や訪問時間、訪問予定の変更などを自ら判断していた。また、利用者との関係構築にも注力となされ、雑談や傾聴、コーヒーを共にするといった日常的なやりとりが信頼関係の土台となり、利用者のモチベーション向上やケアの受け入れにつながっていた。福祉用具や住宅改修の活用も自立支援を後押ししており、特にセラピストによる福祉用具の調整が重要な役割を果たしていた。加えて、介護職員が訪問計画や支援内容の調整に積極的に関与しており、現場での主体性と専門性が重視される環境があった。支援は多職種協働で進められ、チーム内外での話し合いや自治体との合意形成を通じて支援の方向性が常に再検討されていた。介護ソフトも用いた情報共有によって、現場の実践が制度運用と密接に結びつけられていた。以上から、リエイブルメント支援が制度と現場、専門性と日常のあいだに生じる境界領域において、動的に構築されるプロセスであることが明らかとなった。

5. 考察

リエイブルメント支援において介護職員が制度的な枠組みに従いながらも、柔軟で即応的な実践を行っていることが明らかになった。ジョブ・クラフティング理論から、こうした実践は、介護職員が裁量をもってタスクの境界を調整し、関係性を築き直し、自らの仕事の意味づけを変えていくプロセスと理解できる。また、そうした裁量は個人にとどまらず、チームや多職種との協働によって支えられており、公式と非公式の境界を横断しながら「協同の裁量」が実践されていた。制度と現場のあいだに存在する「境界関係」で行われるリエイブルメント支援においては、標準化された枠組みと利用者の個別ニーズとのギャップを埋める創造的で応答的な調整が日々行われていた。